

第 15 期水俣学講義

「私にとっての水俣病」

熊本学園大学

2016. 10. 13

中村雄幸

水俣の魚屋

自己紹介

その1

* 新潟県中頸城郡吉川町大字大賀に生まれる。
1950年10月。間もなく66歳

* 大賀は戸数17戸の限界集落であった。18歳、高校卒業まで過ごす。

* 小学校—遠足。 中学校—臨海学校。高校—進学を目指して
猛勉強？

* 水産大学校に入学（1969年）

別天地に有頂天 憧れの海の世界を満喫。

友人と自転車で九州一周。「この水は飲むなよ」水俣で忠告された。

忍び寄る学園紛争、水大闘争が始まる。69年秋
どん底に落ち込む。

社会って何だ？ 国家って何だ？ 俺はどうすれば？

水大闘争は終結していくが、元に戻れない自分がいた。

授業も受けず、バイトをしながら寮にこもった。

最初の挫折！

「雄幸、水俣に行ってみないか」友人に誘われた。

自己紹介 その2

* 杉本さん一家との出会い

早朝のイリコ漁 日の出に躍る銀鱗 沼のような茂道

浦

雄さん、栄子さんの姿

自分にもできることがあるのでは！

一ヶ月後に再訪し、1年間ほどやっかいになる。
今にして思えば、私は支援しているつもりだったが、
とても迷惑なことだった。

* 侍の家に移住 1972年

水俣病センター―相思社設立に向けて動き出す。

(財) 水俣病センター―相思社

1974年

* 爆発的な患者運動が燎原の火のごとく

1973年 補償協定書締結。以来申請者相次ぐ
水俣病認定申請患者協議会発足（1974年8月）
部落担当—市内を担当する。漁民とはまた異なる人々。
申請の手続きを手伝う—救済を求める理由は
新たな闘う患者と出会う—変貌する人々
個性豊かな人たち—悩みも不安も語った。大好きだった。
自分の事ばかり思い悩んできたが、初めて人に触れた思
いだった。自分よりも人が好きになった。

どん底の底が抜けた！

私は当時20代、皆さんと同世代でした。

* 総申請運動—市内全域の地区公民館で

映画「水俣病その20年」上映と申請用紙の配布

正しい知識と正しい情報を広げて、「皆さん！立ち上がり
ましょう！」と呼びかける。

* 水俣湾のヘドロ処理—最初から最後まで付き合った。

漁場としての水俣の海を、水銀を通して見ることになる。

汚染の実態を知るにつれて怒りが込み上げてくる。皆だまされていた。今食べている魚が危ないのだ。

それにしても仕切り網はすごかった。

仮処分、裁判、数限りない抗議行動もむなしく仕切り網が撤去され（1995年）、自主規制が解除された（1997年）

* 患者運動の停滞

裁判も一最高裁でひっくり返される（待たせ賃）

国賠訴訟も踏み切れず

原因裁定も不受理

自己紹介 その3

* 魚屋（移動販売）になる

理由—行き詰まりを感じた。

患者運動、ヘドロ処理、相思社—MUSTからの脱却

日和見かも！というよりは2回目の挫折！

* これからどうするか自分と向き合う。

水俣病から水俣へ

不知火海と漁師の世界が輝いている

魚屋は昔から何となく憧れ一

魚（うお）という幸せを売る去年今年（こぞことし）夕子

自己矛盾を抱え込みながら

私にとっての巨大な風車とは何か？

ドン・キホーテのように

* 不知火海の再生

不知火海はこんな海です

海に関わる栄枯盛衰（海・漁師・魚屋それぞれに）

生き物たちに学ぶ

起死回生の一手となるか一数年間の全面漁獲禁止

環不知火海生活圏という小宇宙

ブルーツーリズムの可能性は

水俣に来てハイヨ～

つらい時、悲しい時、悔しい時、迷ったら来てネ！

水俣病で鍛えられた市民がお待ちしています。